平成２１年１２月１日発行

かまぼこ

第３４号

発　行　地域力推進蒲田西地区委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

わがまちの顔
児童文芸作家　吉井　隆子　さん

東矢口三丁目にお住まいの吉井隆子さんは、手作り絵本を作成されている児童文芸作家です。

学生時代から文章を書くことが好きで、文芸部に在籍し、文学散歩が趣味でした。

吉井さんと手作り絵本との出会いは、昭和六十一年、大田区が主催する手作り絵本の講習会でした。「世界にたった一冊の絵本を作りませんか」という言葉に惹かれて受講したのが始まりでした。

あわせて「童話を書こう」という講座も受講し、童話の書き方も学びました。その時の先生や仲間とはその後も勉強会を重ね、今でも時折手紙を交わすなど、交流が続いているそうです。

昭和六十三年には、「田舎からきたおばあさん」という作品で、第十一回日本絵本賞文部大臣賞を受賞されました。

平成五年十二月からは、城南タイムスに「創作童話　小さなおはなし」を掲載し、好評を得ました。この連載は平成十三年十一月まで続きました。

現在は、日本児童文芸家協会の会員として活躍されています。

年に二、三冊の本の発行を目指して活動され、六十四年前に起こった戦争をテーマにした「戦争って何だったの？」という作品を執筆中です。

「実際に戦地へ行かれた方のお話は、淡々と語る言葉の奥に真実があると思って書いています。ただ、平成の子供たちにどのくらい理解してもらえるのだろうかという思いが、毎日、頭から離れません。」

と、語っておられました。

また、ボランティアで、オレオレ詐欺や子供の連れ去られ防止などを扱った防犯紙芝居の脚本を書かれています。この防犯紙芝居は、防犯功労賞を受賞しました。子供の連れ去られ防止をテーマにした「ゆびきりげんまん　おやくそく」は、防犯活動の一環として、地元のイベントなどで読み聞かせが行われています。

吉井さんは、

「ライフワークは、ゆっくりと欲を出さず、『失いつつあるものに光を』というテーマに取り組みたいと思っています。」

と、おっしゃっていました。

吉井さんの作られる手作り絵本は、吉井さんのお人柄が表れた、あたたかく優しい作品ばかりです。今後の吉井さんの、ますますのご活躍を期待しています。

（取材　山﨑・近藤委員）

投稿
池袋ウエストゲートパーク
石田　衣良

「池袋にすごく優秀なトラブルシューターがいるって聴いて来たんだけど、町の裏と表に通じていて、どんな人間でも探し出せるし、難事件も解決してくれるいい男。」マコトを尋ねてきた人間はみなそう言う。

警察沙汰にしたくない、世間には知られたくない諸々の事情を抱えた相談者が尋ねてくる。相手はヤクザモノから、日本語も満足に喋れない外国人、年端も行かない子供まで。看板を掲げない「裏探偵家業」というところか。

いまや若者たちの間では、カリスマ作家的な存在である石田衣良が十一年前に書いたデビュー作品が「池袋ウエストゲートパーク」通称「I.W.G.P」である。シリーズ化され、いきなり第三十六回オール読物小説新人賞を受賞。後にテレビドラマ化や、コミック本も出版される。ドラマやコミックを見てから、小説を買うという、通常とは逆の現象も当時話題になった。作家本人もワイドショーやニュース番組にリポーターやコメンテーターとして出演している。

「I.W.G.P」は、一年に一冊のペースで発行され今年で第九巻、外伝を加えると十冊目になる。

主人公は果物商の息子で普段は「池袋西口公園」で屯している真島マコト。工業高校を卒業し、暇なときは家業の果物商の店番をしているフリーターである。後にファッション誌のコラム記事を頼まれて書くようになるが、収入は微々たるもので、依然、フリーターには変わりない。高校時代は不良少年であったというが、クラッシック音楽の鑑賞と読書好きという意外な一面もある。

彼は持ち込まれた相談や事件に、本来の人の良さからか、また好奇心が人一倍強いこともあり、やがて親身になって関わっていくことになる。しかもその決着のつけ方が破天荒な方法、まさに驚天動地そのものなのだ。

いま、世間を騒がせている問題に、覚醒剤、ＭＤＭＡ等のドラッグや大麻の流行がある。有名女優が、髪を振り乱してレイヴ会場で踊り狂う映像が繰り返し流された。七月二十二日には、日本では四十六年ぶりという皆既日食に合わせ、奄美大島で密かに開催されたレイヴに、一部の有名芸能人が参加していたことも明らかになった。

このレイヴとドラッグが切っても切れない関係であることが克明に描かれているのが、七年前（二〇〇二年）に発行された「I.W.G.P第三巻・骨音」の第四話「西口ミッドサマー狂乱」である。親友のタカシから頼まれた仕事、それはレイヴの主催者と悪質なドラッグの密売人のトラブルの解消であった。両者とも公にはできない立場にあり、まともにぶつかれば、死人、怪我人が出る。その解決方法にマコトは頭を悩ます。

マコトは、初めて五千人集会の幕張メッセ会場で、レイヴの初体験をする。まるで建築現場のような大騒音のなか、巨大なホールのステージにはテニスコートほどのディスプレイが設置され、興奮した若者たちが踊り狂っていた。深夜から翌日の朝まで疲れを知らずに踊り続けるのだ。体力に自信のあるマコトにも、とてもついて行けない。ドラッグの恐ろしさを知らされた。

日本の若者の、ほんの一部の生態かも知れないが、衝撃を受けたことは確かだ。軽く一～三巻ぐらいまでがオススメ。

（ペンネーム　にゃんぱぱ）

編集後記

先日、区内の子供のイベントで、今回「わがまちの顔」でご紹介した吉井隆子さんの作られた防犯紙芝居の読み聞かせが行われ、子供たちが真剣に聞き入っていました。子供たちにわかりやすく、危険から身を守ることを教えてくれる、素晴らしい作品でした。

特集で取り上げた「大田の工匠百人」は、今後も表彰がありましたら、ご紹介していきます。

情報紙に対するご意見やご感想、また投稿などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，979人
	女	27，344人
	計	57，323人
世帯		30，919世帯

平成２１年１１月１日現在

大田区モノづくり優秀技能者表彰（大田区の工匠百人）

大田区のモノづくりは、中小企業に従事する技能者によって支えられています。従業員三名以下の企業の腕利きの職人の方に焦点をあて、「大田区モノづくり優秀技能者（大田の工匠百人）」として、五年間で百人の方を表彰することにより、その技能の継承及び後継者の育成を目的としています。初年度の今年は、二十四人の工匠が選定され、去る六月十二日に表彰されました。管内に三名の受賞者がいらっしゃいますので、ご紹介いたします。

吉田さんはレアメタル（希少金属）の微細加工を得意とするキャリア四十年の職人である。作業場を訪ねると、大小の機械が整然と並び、過去に手がけた針より細く、米粒より小さい見本が目に留まる。「ほんの一部です。モリブデン、タンタルその他どんな難削材でも、ミクロン台の精度を確約します」と、見本の精緻さと説明の説得力に感動する。細かく美しい繊細な部位には知恵と技術が凝縮され、もはや芸術作品の領域に等しい。今回工匠として表彰された所以は、ここにあるのだ。

口コミで評判が広がり、飛び込みで訪れる顧客に「他に作ってくれるところがないので」と言われ受注した品の中には、珍しい形状で一つひとつの工程が複雑で難しいものがある。連日深夜まで設計図とにらめっこをし、手法や手順を幾通りにも創意工夫すると、素材の持ち味を生かした製品に生まれ変わる。

レアメタル加工の達人　吉田　晃さん

「当社はどんな困難な加工でも依頼に沿って挑戦していきます」と、熱っぽく語ってくれたのは、多摩川二丁目の吉田晃さんである。

約束の納期と製品に感謝されると、職人として達成感と次へのステップの意欲に燃え、一層技術屋冥利に尽きるという。

吉田さんは、二十一歳のとき航空高専で学んでいたが、西六郷で父親が営む機械工場が忙しく、家業へ入る。のちに、「外のメシを食ってこい！」と父親の勧めで自動車部品会社へ修行に出る。三十一歳のとき、ふとした切っ掛けで非鉄金属レアメタルに出会う。耐熱・耐食・耐久性に優れ、これからの日本の産業に必須になるであろう素材に魅了され、急遽実家へ戻る。しかし、当初は暗中模索、レアメタルの属性から切削、研磨等加工困難という壁に突き当たる。従来の工具では歯が立たず、最適工具・治具を独自で研究開発する必要に迫られ、努力の結果実用化に漕ぎ着けたという。

現在宇宙航空関連部品や、通信機器部品を中心に製作している。

「とかく現代の風潮は、目先の効率よい利益に走りがちだが、『モノづくり』の重要性にもっと関心を持ってもらいたい」と、若者たちへのメッセージがあった。

（取材　滝口委員）

キサゲ加工の達人　瀬野　光義さん

多摩川一丁目の瀬野光義さんは、昭和四十四年独立開業以来、工作機械の製造、改良、修理を手がけています。工作機械の躍動部を「キサゲ加工」により高い精度で平面に仕上げ、五、六十年前の古い機械でもオーバーホールし、新品同様によみがえらせます。

「キサゲ加工」の技術を使いこなす職人の中でも、瀬野さんの高度な技術は、業界でも高く評価され、平成十八年には「東京都優秀技能者（東京マイスター）」として認定されています。

「キサゲ加工」とはキサゲという道具を使い、手作業で理想的な摺動面や基準面を仕上げる作業のことです。十ミクロン程度までは加工機械を使用し、精度を出すことは可能ですが、それ以上の精度となると「キサゲ加工」が重要な加工方法となってきます。機械加工では加工時に発生する熱により材料に内部応力が発生し、歪みが出やすくなりますが、「キサゲ加工」は手作業のため摩擦熱が発生しにくく歪みを抑えることができるからです。

工作機械は金属を精密に切削、研削する機械のことで、「機械を作る機械」と言われています。一ミクロンを切る精度を求められる世界なのです。また、精密加工には温度管理が重要で、わずかな温度差で金属に伸び縮みが生じ支障をきたします。瀬野さんは室内温度を二十一度に保った部屋で、ミクロン単位の制度を誇る工作機械に取り組んでいます。

工作機械の仕事に携わって半世紀、現在は弟さんと息子さんの三人で伝統の技術を守っています。しかし、百年に一度の大不況の波を受け、町工場の倒産が相次ぎ、瀬野さんの仲間たちが次々に廃業していく様子を目の当たりにし、この先どうなっていくのかと心配されていました。

外国には真似のできない、日本だけの高度な技術、瀬野さんが時間をかけ苦労して習得した匠の技を、ぜひ次世代に受け継いで欲しいと思いました。

（取材　高橋委員）

機械部品加工の達人　佐久間　幹夫さん

佐久間幹夫さん（西蒲田三丁目）の機械部品加工技術は誤差０・０１ミリメートル、まさにミクロの世界なのです。八十八歳の今も拡大鏡などは使わず、普通の老眼鏡だけで図面どおりに削っていくのです。佐久間さんの得意は「丸もの」。隣では同じ道を歩む息子さんが「四角もの」に取り組んでいます。

「小さな部品を作るには、そのために必要な刃物から作らにゃならんのです。日本人の技術はどこの国にも負けません。同じものを中国や韓国でも生産していますが、使えない部品が出てくる。精度が高くなればなるほど日本でないと作れないのです。手作業でできる量はたかが知れているんですがね・・・」

穏やかに語る佐久間さんの表情からは、「ものづくり」を生きがいにする人だけが持つ自負と無欲の暖かさが伝わってくるようです。

佐久間さんは独立重砲連隊としてシンガポールで終戦を迎えました。この道に入ったのは、戦後に多摩川のプラスチック工場で機械の修理を頼まれたのがきっかけでした。昭和三十七年、精密部品の加工に魅せられた佐久間さんは親元である現在の地に小さな作業場を構え独立したのでした。

「最初は大きな会社から仕事を貰う手づるがなくて苦労しましたが、朝鮮戦争特需から仕事が増えました。そのうち他では出来ない難しい注文が持ち込まれるようになりました。それも一個、二個といった数でしたが全部引き受けたのです。」

それでも、仕事の量には多少の波があり、大切にしたのは仲間同士の絆だったと佐久間さんは語っています。「この仕事はウチでは出来ないが、あの機械がある工場なら大丈夫だ」と仲間を紹介。また、仕事の疲れを癒す酒席などの交流で仕事の情報交換をしたのです。

米寿を迎えても一日五、六時間は仕事をこなす佐久間さんですが、一番の気掛かりは昨秋以来の世界的な不況です。設備投資の大幅減は大田の工匠をも直撃しています。仕事をしたくとも仕事がない日があると佐久間さんは顔を曇らせました。そんな日々の中で、ピタッと決まった会心の試作品なのに、コンピューター制御の大量生産にもっていかれるケースもあると残念がるのです。

佐久間さんは、四年前から御園中学校の職場体験学習に協力されています。生徒さんたちを自宅兼工場に受け入れ、文字通りの体験学習です。

「ものづくりの楽しさを肌で感じて欲しいのです。自力で作ったものがどんなに素晴らしいかを感じてもらいたい。去年はステンレス棒を加工してボールペンを作りました。今年は真鍮を加工して風鈴を作ろうと考えているんです。」

佐久間さんはこう言って顔をほころばせました。

更に十一月には東京都優秀技能者（東京マイスター）に選ばれるという大変な栄誉に輝きました。息子さんは、「長生きしてよかったね。」と語られていました。

（取材　瀬川・六車委員）